

熊井明子「シェイクスピアの香り」、東京書籍、1996年。

著者は、日本におけるポプリ研究の第一人者であり、シェイクスピアにも造詣が深い熊井明子さんです。

「ロミオとジュリエット」や「夏の夜の夢」を含む7つの戯曲を、7章にわたり、香りの文化史、ハーブやスパイスの実用例、そのメタファーなどから分析しています。

1章ごとに、作品のあらすじがまとめられており、ローズマリー、ラベンダー、タイム、ミント、ローズなど、日本人にもなじみのあるハーブや、スウィート・ウォーター、ポマンダー（香り玉）、ノーズゲイ（香る花束）、香り手袋、ハーブで作った眠り薬や惚れ薬、ワインやビール、ハーブやスパイスなどで香りづけをした料理等もたくさん登場します。

各ドラマのポイントになるシーンは、香りによって印象が強められており、シェイクスピアは実に効果的にその象徴性を表現しています。

ヨーロッパの文化は、香りの文化でもあります。香水、香料、スパイスなどを求めて、インドや東南アジアへの勢力拡大がありました。シェイクスピア作品に頻出するハーブは本草学の発達を物語っていますし、ポマンダーはフランスやイタリアとの交流からもたらされたものです。

シェイクスピアは、心地よい香りと悪臭を放つもの両方を作品に登場させていますが、嗅覚が人間の記憶や感情的な反応に影響を及ぼす作用を利用したのでしょうか。

「香り」という観点から、シェイクスピア作品に親しんでみてはいかがでしょうか。

(Y K)

